

山崎 壽の門松

作者 近松門左衛門

上卷

筑波根一衝く羽子にかけて陽成院の歌を取合せたり
九軒一羽根衝く歌より大坂の遊廓新町九軒町に續けたり
羽かはす云々二人羽衝合を客と遊女と睡び合に寄せたり
木薬子一色黒き禿も後に立派な太夫になる
末長き云々一禿の長き返事に松即ち太夫が開劇る

歌筑波根の峰より落る瀧の白玉、一い二ふ三い四、五六七八九軒の町に羽かはす、比翼の羽子板木薬子も、磨入ては色に成、戀の二葉の禿松、枝と枝とを遣羽子も、三、四、う、い、つ、も末長き、返事に馴るゝ門の松、抱への松あり客も待ッ。先新町の初子の日、松澤山に深線、千代も根引は絶へすまじ。禿コレく新介、嫌といふ物無理に突やつて、それ見やの、羽子を松へ突とめやつた。もとの様にして返やしや」と、袖に取付禿共。新ナフ取付きやんな。男に突かすりや留まるとは、頭から知れた事。珍しそうに」と振放し、手を叩いて「ほつほらほ、此方やらぬ。あべかこの新介」と、走て内へ駈込めば、禿そりやく逃すな捉へよ」と、羽子から起る諍は、飛ぶが如くに追ふて行く。情口説の萌出る、雪間に素足伽羅薫る、霞の袂虹の帯、冷泉、雲の上著をゆりかけて、新艘突出し出立

新町の云々一松を太夫に譬へ身謂するを根引と云ふ(瑠璃天狗)ほつほらほ一ホイソリヤに當るべかこ云々一べつかつこうにて此新助は赤目やるとなり雪間に云々一白い足て歩けば伽羅の匂がする霞の袂一以下花魁道中の美態なる形容新艷突出一禿よりなる傾城と飛入の傾城(色道大鑑)紫鹿子一以下芥子に消え、經るに降る、越後に繪をかけたりやリ一遣手七ツ屋一質屋偽茶一茶色の藍かゝつたもの小舌たるいし

榮へ、歌 紺に鬱金に薄染淺黄、織物縫物染物盡し、小紋三重染二重染、淺黄鹿子に彌鹿子、紫鹿子に經る年の、憂さをも芥子の紅鹿子、極彩色の越後町、三筋に三つの春たて、松若綠梅時節、やりが前垂茜さす、天も酔ふたり人も酔ふ、初盃の内祝ひ、過て諸祿の妓揃へ 雪駄の音のしやらくと、春めく中に紫は、色の司や藤屋が内、吾妻といへる名木の 松には續く花もなき、戀と利發を目の張に、情こほるよ道中は、往來の人も立留り 花を見捨る鷹金も、歸り廓の晴れ處 身にも年にも恥もせず、七十計の古婆婆の、古綿帽子の頬冠り、春知り顔に七ツ屋の、藏の戸出る 鷹茶の、布子の袖を摺れもつれ、附纏ひ行足本。遣手のかやが聲高に、「是爰な婆様、此廣ひ道を何ぞいの。高砂の尉と姥が離別したやうな態で、太夫さんに摺れもつれ、エイ嫌らしい小舌たるい。彼の跡から、同じ様に尾るて來る若い男は、昇夫の風共見へぬ。此方の連か。とつと除てもらはふ」と、押遣れ共腹立す 鷹ヲ、お道理様や御免なりませ。音に聞えた吾妻様、お慮外ながら染々と、お咄し申たい事御座りまして、廓をぶらく致ます。何卒お聞入なされて、お情に預れば、婆々が後生も助かります 大事のく太夫様に、鹽の辛い梅干婆々が すいこな奴と思召そ。お恥しや」といひければ、遣手ヲ、いや、口合をやらる

つこい
すいこー酔腐に
てをかしたるもの
古いー珍しくな
い

引舟ー園女郎

重山ー引舟の名
に緊きをかく

る。是女郎様達の全盛を見掛て、姨の祖母のといふ騙瞞ごとほ古ひく。其爲のやり手。是眼が黒ひ、見て置や」婆、ナフ怖い事いふて下されな。騙瞞事いふ様に見へますか。ア、貧乏はせまいもの。つれあひは船場で隠れもない、千貫目の廻しもした難波屋の與左衛門、爲換の金が滯大坂を仕廻ふて八幡へ引込果られた。其難波屋の婆々で御座る。彼の頼冠は獨息子、千貫目の大釜の湯氣で育つた奴なれど、今では錢壹貫の廻しもならず、難與平くと、其日過の日用取。騙瞞と見ゆるもお道理」と、老の繰言眼に涙。問はず語に古へを、思ひ出したる風情なり。引舟禿遠慮なく、「ム、踊歌にうとふは祖母の事か。踊歌いく山崎く、八幡山崎難與平のお祖母、ヤア此、誠に金を出せさ。盆に御座れ」と笑ひける。吾妻は始終嘸ひ泣、「皆の衆は何笑ふぞ。戀で有ふが有まいが、勤めする身の習ひ零落と聞ば見捨られぬ。吾妻を見込で頼むとは、いとらしい婆様。傾城冥加聞氣でござんす。爰は人立重山、ちよつと横町の小店をかりの揚屋町、爰へく」と手を取ば、涙を流し、婆、忝なやく。お咄し申事迎も、此祖母が此年で、何の願ひ御座りましよ。月共星共思ふは彼の與平め。いつぞや人に雇はれ、此新町へ文の使の次手に、吾妻様を見染て、ホ、くくく親の口からア、おはもじ、戀病みに煩ひます。家主隣の

五器―櫛下げる
乞巧の事

聞へも有、五器提る瑞相かと吐つてく、追出して退けふと存たれ共、ア、昔の身ならば、若い者の、手かけ妾のといふ最中。申憎いが、太夫様達一年二年買詰ても、何處の痛みにもならぬ身躰。其氣で育つた奴の事。ア、可愛や、何うぞしてやりたい、と母が瘦我も子の望みも、金銀といふつはものには、又してもへし付られ、見殺しにする子の命、氣遣ひするな、情を商買になさるゝ吾妻様、歎き申てお盃戴かしよ。それで思ひ切居れ、と彼奴を連れ、附纏ふも子の可愛さ。母が命が、一夜さの傾城代にも成ならば、今でも死んで見せませう。押付がましい事なれど、ちよつと計のお盃、是で上つて下され」と、袖から出す小半入りの、徳利に餘る親心、缺盃の蒔繪の狸々、笑ひこうじて涙の種、泣事知らぬ遣手さへ、彼方向くこそ哀なれ。聞程吾妻押俯伏き、「粹な婆々さん、わたしが云はふ詞がない。與平様は何處にぞ、顔が見たい御坐りやせ」と、呼れて祖母も一時に、千歳を延ぶる門松の、影にかくると難與平、指を喰へて這出る、袖口取て引寄せ、吾妻、惚れたくと人毎に、誠もない口癖さへ、勤めする身は先譽れ、公平の様な男を煩わしたは此吾妻。嬉しう御座んす忝い。命にも替へ身にも替へ、逢通したい物なれど、戀といふてはちよつとの詞もかはされぬ、深い男が有はいな。山崎の與次兵

公平―坂田金時
の子で蕪傑

せついで一切を
る、甚し

御旅先一察時に
御輿を留置く所

まぶらせ一見つ
めさせ

衛様と申て、新艘の初床より、面白いと悲しいと、譯のありたけ仕盡して、勤めは名計、夫婦といふて今一人と、外には漏す水もなし。といふて母御様の御眞實、せついでお前のお心入、立ながらの盃に酌流さんも本意でなし。是重山、預けた物それ爰へ「盃あい」と答へて引舟が、袂の内の服紗物、色こそいはね山吹の、十兩計一包、吾妻、是も可愛ひ山様のゆへ、譯の有金なれど、母御様へ進ぜます。與平様の身の廻り、立派な大盡に仕立て下さんせ。渡り竝の客に身を賣るは傾城の習ひ、枕をこそかはさず共、歳月の物思ひ。酒で流して下んせ」と、渡す小判を難與平、吾妻が膝へどうと投付、駟胴窓に御座る、曲がない。おりや金にや惚ぬ。貧な者と侮つて、金で口を塞ぐのか。我等が宿は庭かけて七疊半、貧乏神のお旅所といひひそな住居。師走正月もおんなし布子一枚なれど、傾城に金囉ふて揚屋へ往たといはれては、此難與平人中へ頬が出されうか。戀にかこ付物取とは、目きよが違ふた吾妻様。七十に余る母迄、各に顔まぶらせ、無念に御座る、許して下され母者人」と、聲を忍びて泣けるが、難ア、能ふ思へば、恨みしは不調法。追付與次兵衛殿に請出され奥様に備はるお身、我等は日用取内方へ雇はれて、沙汰でもすればお身の爲に悪い、と後を大事になさるとは尤々。氣遣なされな、ふつよりと思ひ切りました。鼻

さもしい一卑し
いしんぢよ一堅
い人
付届一世話にな
つた心付の贈物
初紋日一正月の
初めての節句

蛇の目一九い紋
形

つくりーツク
ネンと
詰開一談判
押拭ひー原本押
ごい

の先計で戀せぬ證據は是成」と、腰の小刀引ん抜て、既に小指に押當れば、吾妻取付、「待て下され誤た」と、漸に押とどめ、吾金進ぜたは過まりなれど、身の納りを思ふなどと、そうしたさもしい吾妻じやない。與次兵衛様には幼名染の本妻有、父御様は隠れもなひいしんぢよなり。わしから起るお宿のもやぐ、怪氣やら御異見やら、跡の極月の廿日前、ちよつと逢ふてそれから、不首尾くの文計。昇夫揚屋の付届、初紋日の買論も、わしが獨の胸算用。年々の有うへ年切増し、男の恥を包む程、身抜けのならぬ此苦患、廓で祖母に成吾妻、可愛と思ふて下され」と、恥も哀も打明けて、つがなくこほす正月の、涙も顔に憎からず。絞る袂の上一重、打かけ脱で帯解く、逢ふ夜の床の暖まり、又逢ふ迄は冷さじ、と深い中著は烏羽玉の、黒羽二重の蛇目の紋、吾與次兵衛様のお小袖、暫しも身は放さねど、是が私ご心一ぱい。是を著て、表向の客に成つて下んせ」と、小袖渡せば難與平、「これが誠のお情、私戀は叶ふた」と、押戴いて泣計。母は始終つよくりと、「のふお傾城の詰開きは、むつかしそうな事や」とて、耳を澄すぞ殊勝成。與平涙押拭、「お前に逢ふて眞實の、涙といふ物覺ました。金の草鞋で尋ても、二人となひ女郎に思はると、與次兵衛殿はあやかり物。著物も戻しませう、代りには、

致すにこそ一致
すにあらす

庭鏡一鏡頭にや
る鏡

どか儲一俄の儲

三ツ羽云々一金
儲ける事矢の如
く早い(瓊瑠天
狗)

緩り一ユツクリ
と落付

以前の「小判囉ひました」と、取手を母がはつたと打「ヤイ卑怯者、今の詞がはや違ふ。難波屋の家に疵付るか。けびた奴め」と吐られてかぶり掉り、「いやく身の慾に致すにこそ。吾妻様と與次兵衛殿是程の深い中、聞捨てよは男がたよぬ。此金を此儘置けば揚屋の庭鏡、埃に成てすたります。小判と見れば小判、吾妻様の身の油金をおれが預つて、此方も身から油商ひ、どか儲すればどか損する。つると江戸へ下つて、十兩を百兩、百兩から貳百兩、貳百兩から五百兩、段々儲けの商ひ拍子、千兩にするは三ツ羽の征矢。關東廻しの商ひの筋道は我等が家、吾妻様根引にし、與次兵衛殿とお二人悦びの顔を見て、今日の情の御厚恩を送らねば、此難與平立たぬ。常々金がなく、是を買ふて斯う賣てと、心當の事共有。江戸の道中、二歩では高砂野宮。母者人は、横堀の妹婿に預けりや緩り。其内金も上しましよ。難與平が立身、吾妻様の御出世、與次兵衛殿の本望」千里一飛び一拍子、一器量有男なり。吾聞けば聞程頼もしい御心底、此吾妻に戀有身で、與次兵衛様に末長ふ添せうとて、俄に江戸の思立、二人が中のむすぶの神さん。門出の盃、染々お禮申たし。井筒屋へ伴ひましよ。母御様は如何じやへ」母「イヤ與平が望叶へば、此世からの生佛。太夫様おさらば。彌頼上まする」と、與平が背中しとよ

露一祝儀に出す
小粒銀
阿波座一新町廓
の通り
贅こき一贅澤い
ふ
こんだ一呑込ん
だの畧
どれこむ一へロ
ツいて入込む

わりやう一瑠璃
天狗に五絲の字
を宛つ、唐織に
て無量にかく
やう聞一よう聞
の亂

打、「こりやあやかり物、嬉しいかく」と、興を持せてやはらぐる、母は帮間子は大盡、はつと打たる露よりも、太夫が情いたゞいて、歸るさ急ぐ長持急ぐ、いそぐ賑々揚屋町。やり引舟が、「アレく太夫さん、阿波座から煩い和郎が見へるぞゑ」吾「ほんにく贅吐きの彦さん、しかもづぶく酔ふた足本、見咎められては猶悪口」と、手繰り寄邊の井筒が許、内證花車に吹込めば、「こんだ」と計與次兵衛が、小袖をかりの難與平、見馴ぬ揚屋の大騒ぎ、戀ふるひしてみすほらし。足はどれても目角は強き、袴肩衣横筋かい、町一ぱいをひよろくと、直にどれこむ井筒が座敷、吾妻は烟管の吸口閉ぢ、物もいはずにあちら向く。與平は人に見られじと、火燧の内へ顔指入れ、被く布團の緞子より、むりやうの事ぞ思はるよ。彦介花車を引捉へ、「コリヤ花車様め、聞給へ。正月は新春の御慶目出度く申納候。此々此鼻は、新酒の酔紛れ、積る恨を申始候。ナ何んと、否か。面白い。其處な遣手めやう聞ケ。いかな吾妻殿でも、太夫様でも、畢竟直段の高い總嫁じやないか。何と、否か。嫌とは申されまい。それに山崎與次兵衛には賣て、此葉屋の彦介には何故賣らぬ。一文一錢直切らぬ拙者を、いか成者とか思ふらん。忝くも桓武天王無躰の後胤、攝州津の國服部の住人葉屋の彦介、大坂に五間口の棚も所持仕る。貸藏も

つかまへさー空

生爪一妓が博客
の爲に髪切り爪
放す等心中立に
する(色道大鑑)

ひとずる云々一
引摺る狐んだに
由に吾妻を我が
廻らざら廻らな
んだら
頬がまち云々一
頬げたをびつし
やり打つ

身上一花代出し
て勤を休む

無息力一無茶力

持参つかまへさ、大金持を知らぬかナ。ア、慮外ながら、嫌とはいはれまい。都島原上林の高橋に、金遣ふて髪切らせた。伏見撞木町升屋の高尾に、又したよか遣ふて、心中に生爪を放してくれた。まだ鼻も殺してくれた。耳を殺してくれた、大々盡の彦介。山崎の與次兵衛に仕負て、藤屋の吾妻に三度四たびふられては、此彦介一分たよぬ、半分もたよぬ。今日から三日ひこするつかんだ。相場の高い總嫁の買初め仕り、金銀米錢ぐはらりぐはらりと蒔散したら、吾妻がくるりくと廻らざ賭じや。サアくくく買ふた」と、しなだれ寄れば、吾妻むつと頬がまち、ひつしやりとみしらせ、吾、エイあた贅ばつた、聞共ない。其高橋とやら高尾とやらは、其方の様なうつそりでも、金さへ遣へば、髪もきろ爪もはなそ。京や伏見は知らぬが、此新町の傾城は、魂が違ふた。恐らく此吾妻はいかなく、一生身上り仕暮しても、其方の様な意地腐りに、小判の手木でも動く女郎じやないぞや。がやくく口聞男の意地ならば、手柄に吾妻を廻して見や」と、ずんど立。彦、張の強いに猶惚た。此彦介は吾妻を廻して見しよ。まはるはく、遣手めが頬がぐるぐる廻るは、爰の家も廻るぞよ。廻るはく山姥が、ウタイ山又山に山めぐり、ハハ面白。どうでもこうでも吾妻殿を、奥へ連れて」と引立る、どれに下地の無息力。「是はどふぞ」と引

額に毛あてる
男をつくる事

つきくつきく

巳午一見ぬ間が
よいと云にかく

除る、引舟に向ふ風、花車は彼方へ押込で、遣手も取て鐘梅の落花狼藉、昔を堪へぬ難與平、齒切をしても堪忍ならず、彦介が足首を火燧の内よりしつかと取、うんとしむれば、彦介「あいたよたよ。ヤレ足首がちぎるよは」と、目は撃むれど口減らず、「此火燧には狼が有そふな」と、蹴もじるを引倒し、蒲團押除け突と出、熟柿臭い彦介が、鼻の先に澁柿の、澁い顔して立はだかる。彦介「ヤ此奴何じや」難「何者とは眼を明ケ。人じや男じや、男といふ物見て置け。うぬは何者」彦介「葉屋の彦介といふ男見ておけ」難「ヤ生臭い男呼り、おけおけ、置てくれ、額に毛抜もあてる者が、いとほげに女郎衆いぢつて何の男。サア男が定ならおれとせい。サアせぬかい。いやせぬかい。男同士の喧嘩といふ物教へてやる」と突と入、小腕捻上、引擔いで逆とんぶり。ぎやつといわせ頭顛倒、匍匐にはつたと反めらせ、腰骨を七つ八つうんといふ程踏付て、鼻歌に懐手。吾妻つきく、可笑しさ堪へ、笑ひを殺す笑止顔。彦介漸起上り、「聞えたく、與次兵衛がまはし物、彦介を踏だぞよ。山崎與次兵衛覺へて居れ。したが、踏れても此方に七歩の勝、正月早々己が身代踏廣けてくれたな。殊に今年は戌の年、犬は土に寝る物、年八卦に叶ふた。コリヤ人の巳午が恵方ぞ」と、肱を張て立歸れば、「踏れてさへ彼の願、人を踏んだらどふある」

飾 くひつみ一莖莖
みづ／＼云々
瑞々にて次は若
水

緩りくはん一巾
つくりかんに襪
子をかか

も手上げられ一
樂に居給へ
難與平一難儀に
かく

夜と共に一終夜

と、跡は笑ひの賑や、正月買の騒ぎ初め、飾の下では三味引、梯子の影では寶引、節分豆、豆撒き年男、槌の子抱て稻積んで、若戎にかけ鯛、密柑柑子、橘、橙と、祝ふて何處も吉野、榎掲栗、噓で御座らぬ本俵、くいつみに土器、さすぞ、盃ちよつと押へて、去年より今年はみづ／＼、若みんづりの井筒屋と、わきて賑々賑はへり。粹の粹を、越へたる戀の山崎與次兵衛、駕籠を飛ばせて西口より、昇夫がいきつて、「旦那お出」といふより家内、「こりや目出度い」と、跣足で飛んで門口迄、「福の神のお迎ひ、ちやうさやよふさや、千歳樂萬歳樂、奥の座敷に設の火燵、亭主蓬萊、内義は鈍子、娘は土器、牛房も身祝ひ、太夫様も御全盛、お影で我等も仕廻は緩りくわんすで、先大福の口明に、變つた咄がごんする」と、吾妻は與平を與次兵衛に引合せ、有し有様一々を、語る詞に與次兵衛、「兼て意趣有葉屋の彦介、何ふがな、と存る折節、忝い與平殿。此以後はいつ迄も心安ふ御意得ませう。お手上られい」と一禮す。見馴れ云馴れ聞馴れぬ、詞遣ひも第一は、足の癩痺に難與平、只あい／＼と計なり。與「御律義で重疊々々。江戸へとの思立尤々。吾妻が事は苦になされず、一廉の儲して仕合の上洛、門出に終夜、歌飲めや諺へや」雖一寸先は闇の夜と共、母が案じて居ませふ。いかひ御造作。與次兵衛様吾妻

様皆様つらりと遣立た。お暇申」と立出る。奥「余りといへばけたよまし。今宵一夜は苦

しかるまい」難「いやく一步はすの初り、油断は稼ぎの大毒」と、帯引解けば吾妻取付、

「寒い折柄御遠慮のふ、矢張小袖を召ませい。道中も大井川とやらいふ川は、いかふ危

ない事じやけな。御無事で吉左右待まする。やがて」と別れ、奥次兵衛も見送つて、「奥

平殿、山崎には兄弟有と、此奥次兵衛御心便に思召せ」難「慮外ながら江戸にも兄弟有と思

召、互の無事は状通」と、別れて跡は戸障子しめ、月も雲井に寐静り、松に嵐は聳して、

奥平は九軒を一足二足三番太鼓打やみて、廓淋しき折こそあれ、待伏したる葉屋の彦介、

蛇目の紋を知べにて、奥次兵衛と見るよりも、欺し賺してはたと切、ひらりと外し難奥

平、「扱は宵のたわけ者、意趣返しの特伏か」と、突と入て跳倒し、小刀を逆手に滅多突

き。眉間を突かれのた打て、彦「ヤレ人殺し」と聲立る。「見付られては出世の邪魔」と、お

くれを見せぬ難奥平、風を追ふてぞ逸失せける。町中俄に騒出し、「棒よ熊手よ提灯出せ、

大門うて」とひしめけば、彦介はうろくと、相手は山崎奥次兵衛、井筒屋の容めじや

と、喚き立れば奥次兵衛、聞より胸にはつしと堪へ「奥次兵衛是に」と立出る。聲を知

べに彦介は、後よりしつかと抱留め、「相手は捕へた組伏た。騒ぐまい」といひければ、

のた打てーもが
して

三重―三味線の
長き引方にて往
往文句を略する

罪なくて云々―
願基中納言のい
ひけん配所の月
罪なくて見んこ
とさも覺えぬべ
し(徒然草)

左右次第―通知
次第

氣を詰ぬ人―氣
の詰まる思をし
た事のなひ人

賣いては―下に
叶はぬの句を入
れよ
法界悟氣―自分

中 卷

吾妻引舟遣手迄、狂ひ出れど放さばこそ。ハアはつと計の涙さへ、何と成身の三重

おほつかな、罪なくて配所の月を見んといふ、古人の物好き如何なれや。日影も見せぬ
座敷窄、九軒町の喧嘩、葉屋の彦介手負し事、代官所の沙汰と成、相手山崎與次兵衛と
訴ふれば、與次兵衛も男の義理、難與平とは顯はさず、我身の科に引受け、親淨閑に預
られ、相手の疵は養生し、死ぬるか本復か、二つ一つの左右次第、我も生る瀬死ぬる瀬
を、定めかねたる飛鳥川、明日が日知らぬぞ力なき。一家の内に取分て、女房お菊の物
思ひ。一日も氣を詰めぬ人、煩ひも出よふが、何がな心慰みと、炙る餅も我胸も、
共に焦ると庭傳ひ、障子明れば與次兵衛、色も青ざめうつとりと、氣あひ悪氣に俯づけ
り。薄二三日はお食もすまぬ、何處ぞ悪くば藥でも参りませ。地躰お前の短氣が私か
明暮苦に成た。若し私にいたづらあらば、先の相手を切も殺もなさるゝ筈。ハテ傾城は
賣物幾人も賣いで。よしな法界悟氣から此難義も起つた。但其吾妻と私と一つに思
ふて下さんすか。こんな事知つたらば、一寸も出すまい物。悟氣せいで今では口惜しう

に關せぬ人を悟
氣する

預けられた一塵
敷牢に入れられ
た日が母の命日

く
い
く
く
と

御座んす」と、恨まじりのうろく涙。與いふてたもるなく。一天下の人よりも、和女一人に恥かしい。去ながら、石清水八幡宮も照覽あれ、身は切らぬ。なれ共、彦介めが與次兵衛やらぬ覺へたかと仕懸た喧嘩、身が切たも同然、殊に其切手とは男同士の義理有中。奈落の底迄此與次兵衛が切たに成て、相手が死んだら切らるゝ覺悟。とはいへ彦介め、左程の疵ではなけれ共、強請て金にするもがりとは鏡にかけた事。見すく金で買はるゝ命、こつちの藏の金銀では買れぬそうな。預られたは母の命日、皆是親に不孝の罰」と、投首するぞ不便成。菊されば私が父様も、それをいふて、淨閑が聞えぬ、吝いも事による。千兩二千兩入ればとて、獨子の命にかへらるか。慾をさへ離るればつる埒の明事。口惜い此治部右衛門、浪人の身でなくば」と、くいくいふて恨言、多分今日も見へませ。父様の袖引て恥しめていはせたら、何程吝い親父様も、得心なふて何とせう。アレ父様の聲がする。やがて能事聞せましょ」與もう往やるか 又後に見廻ふてたも」菊いとしや淋しからふのと、女夫の顔も打萎れ、涙隔てよ引立る、明障子の明りにも、暗む心ぞ哀成。與次兵衛見廻として毎日淀の渡し舟、梶田治部右衛門は相親家の聲を思ふも娘の爲、老の心を惱せ共、父淨閑はさもなくて、「ヤ治部殿お出。昨日のさしかけの將

お手―先手
成金―將基の駒
が相手の地に入
れば金になる
深田に馬云々―
謡曲兼平の文句
迷惑する駒―與
次兵衛をさす

碁、勝負付ましよ。サア御座れ」追、是は餘りな淨閑老、拙者が毎日老足を運ぶも、與次兵衛事氣遣さ。將碁さしには參らぬ。昨日の勝負は何方らへ成と付てお仕廻く」といへ共、響いやく馬鹿奴が事は運次第。昨日の駒動かせず置ました。サア御座れく」追、然らば勝ても負ても是一番。夕部から盤の上とつくと見定め、工夫した相手とさすはこは物。お手は此方か、サア遊ばせ」響、先飛車先の歩をつきませう」追、ヤ此成金して遣ふでの。こう寄りませう」淨閑頭を叩いて、「ハア、南無三、此馬落た。ウタイ深田に馬を駈落し、引け共上らず打て共行かぬ望月の、駒の頭も見えばこそ。むつかしゆなつた」と案じける。お菊盤の側に寄り、「是父様、彼方の方が落れば此方も落る、兩方の睨合て何時迄も埒明ぬ。迷惑する駒はたつた一枚。淨閑様のお手には金銀がたくさんある。慾を離れて金銀さへおうちなさるれば、是此父様の、向ふの淨閑様の、此馬は助かる。何卒手に有金銀を打出させます様に、思案して見さしやんせ。合點かく」と袖を引ば、治部右衛門打領さ、「チ、くくく能ふ智恵付た。呑込んだ」と、いへ共淨閑氣もつかず、「親じやと思ふて助言いふまいく。又ちよつこりと歩で合致そ」追、ム、シテお手は何く」淨閑が手には金三枚、銀三枚、歩も御座る。此歩で廻したらまだ金銀が殖ましよ。い

金持とは―金持
とはいはれまい
角が醜んでゐる

ぶに首を―歩て
王が殺される意
か

手見せ禁―前の
都詰と共に將茶
の語

かい金持浦山しいか」追金持とは此角が白眼んで居る。斯う審たらば金銀出して打たず
ば成まいぞ」舞でも金銀は放さぬ。桂馬をあがろ」治部右衛門堪へかね、「ハテいかひ咨
齋坊 澤山な金銀握つめて何になさるよ。來世へ持て往るよか。是御覽なされ、此飛車
を斯う引けば、天にも地にもたつた一枚の此方の此王が、片隅へ座敷牽の如く追籠られ、
今の間に落るが、金でも銀でも打散して、圍ふて見る氣は御座らぬか」舞我等が咨いは
知れた事。座敷牽へ入るふが、都詰にならふが、金銀は手放さぬ。歩あしらひで見しら
せう」追此方も歩をもつてぶに首を提らるが悔みはないか」舞構はぬく。先逝て居ま
せう」追「コレ其内に香車の鑪を以、鑪玉に上らるが、それでも金銀出すまいか」舞「勿躰
ない事、鑪玉に上られうが、獄門に上らふが、手前の金銀は放さぬく」と、兩馬強き
慾の皮、傍でお菊は氣を揉て、包む涙も手見せ禁、命手詰と見えにけり。治部右衛門腹
立テ顔 盤中の駒搔寄せ引攔み、淨閑が肩間へぐはらりつと投付たり。お菊はつと驚け
共、淨閑は恟共せず。治部右衛門膝立直し、「恥を知れ淨閑。兩親家は元他人。駒を頬へ
投付ら不、咎めもせぬ恥知らずに、いふも國土の費ながら、將茶にことよせ、金銀出し
て 嘔 與次兵衛命助けよといふ當言、合點せぬお主でなし。歩に首を提られ、鑪玉に

馬が合ふ一窩氣
投合

與次兵衛めが云
云一與次が知ら

上られても、金銀とては出さぬとは、治部右衛門に氣を焦せ、面白いか可笑いか。其方も獨子此方も獨娘、兩方共に懸替なし。聶を子と思ふて居るが、嫁を娘と思はずか。與次兵衛が切られたら、可愛や菊が歎ふか、と思遣てたもらぬは、エ・去ては恨めしい。縁組の時、祖母が留めて、小身成共、侍に縁組たい、何んほう分限者金持でも、町人とは馬が合ふまいとくれぐれ留た。いやぐ、名に觸れた山崎淨閑、武士交りもする仁と、我一人情張て、此比祖母が恨言、お主が吝い無慈悲から、五十年添ふ爺婆々のめうと合迄不利に成、我子の命に替へぬ金銀、さぞや親類縁者が飢死する共構ふまい。我こそ牽人、主人持た一家も有。物知らずと縁を組一門の名を汚す、無念至極」と計にて、喘上けく泣ければ、淨閑もしばく目一侍の子は、侍の親が育てよ武士の道を教ゆるゆへに武士と成、町人の子は、町人の親が育てよ商賣の道を教ゆるゆへに商人と成。侍は利徳を捨て名をもとめ、町人は名を捨て利徳を取り金銀をためる、是が道と申もの。いか成大病難病も、病には療治様々有。國法で取らるよ命には、人參で行水させてもいかなく、助からねど、金銀では助かる。命の買ると金銀、大事の寶といふ事を與次兵衛めが知たれば、此難義は仕出さぬ。なんほう惜み貯へても、死では帷子一枚と

ザに使つたから
難儀になつた

は、此淨閑も知たれ共、死ぬる迄金銀を神佛と尊ぶ、是が町人の天の道。金の罰の當つ

た奴、まだ此上に惜氣もなふ金出して、いか成天罰大難にがな遭ひ居るか、と可愛ひ程

猶出しかねる。吝い名を取る此淨閑、金銀計惜むでなし。塵灰迄惜い物。たつた獨の

世倅が命、惜うなふて何とせう」と、坊主頭を將茶盤、とんと投臥泣けるが、聲治部右

殿のお恨も聲可愛さとは存すれ共、左程に思召すならば、何故日比引寄て、異見もして

下さつたら、斯様の事は出来まい物、と我子の痴氣は思はず、脇懸りの恨が出る。子ゆ

へには愚鈍に成不調法申も存せぬ。奥へ參る治部右殿、ア、死だ祖母は果報じや」と、涙

に咽び立ければ、舅も恨いふ事も、なくく表へ立出る。跡にはお菊將茶盤、何處へ取

付島もなき、寧淨閑様のお詞の道理は聞えた様なれど、金銀なければお命ない、彼の内

藏の金箱も、用に立ねば將茶の駒も同じ事。ア、慈悲のない親御や」と、浮世の頼み涙

にくれ、無常心や入相の、鐘物凄く三重暮渡、鴈の數讀む朧月宿り鳥の寄邊なき、藤屋

吾妻がわくせきの、思ひを乗せて在所駕籠、淀の川水流れの身。海道行も山崎歸るも山崎、

霞が内の畦傳ひ、そりや打渡す丸木橋、見馴れぬ目には怖ろしく、駕籠を留めて折立て、

所躰作るも町風に、譯なき夜半の松の風、裙吹返し呼かはし、戀の山崎そんじやう其處

數讀む一數が數
へられる
わくせき一氣を
せくこと
折立一り立つ
そんじやうそこ
一どこそこ

と、人の教へし家並も、所稀成家造りの、裏門塀のかより迄、扱は爰ごと知られける。
吾駕籠の衆、爰が與次兵衛様のお屋敷、塀越に見ゆるがお部屋そふな。いとしゃあれに
押籠られてこそ。わしや彼處へ往くぞや。ちつと隙が入ふ共、必待てや。戻りも頼ぞや。
烟草が無くば進ぜふか。終往て來ふ」と裙軽く、寄程塀の高ければ、伸上りく、伸上
りても燈火の、影も通さず隙間なき、用心厳しき内の躰、嵐と共に爐路の戸を、敲いて
我が胸踊る、耳を壁に押當て、聞どひとつそと音もせず。吾いつ迄斯うして居たとても、
誰レが知らせの便もなし。吾妻が來たと呼らふかと、佇む足は釘氷、身も冷る渡り冴え
歸る。火燧さへなき座敷窄、「いとしゃ寐てか起てか」と、お菊が見廻ふ駒下駄に、飛石傳
ふ足音の、吾「サア是じや」と飛立許。「與次さんじやないかいな。有にもあられず吾妻が
見廻に來たはいな」と、聞よりお菊はつとして、「さても太い傾城め。何ふする事ぞ心見
ん」と、内より壁を懐しけにほとく敲けば、吾「ム、聞えたか。定めし何處も締つて入
事もなるまいと、私「が心に思ふ事、こまぐ」と此文に有。とつくと讀んで自筆の返事
見ますれば、今「生の本望」と塀越に投込んだり。吾「ア、誰が拾はふも知らないで、女房
の有男の屋敷、遠慮もない」と、扱けば見知たら、臘月にも見違へぬ吾妻が筆

一つ書一箇條
づり別々にかく
書き方
遠ふと一遠ふと

泣きしみづき
泣て袖ぬれる

還ふに疾くに

賢女ごかし賢
女とあだててよ
み倒す
嘘讀む一馬鹿に

子細らしい一つ書き、文詞このかみそり此剃刀は私が研ぐ心の刃こころやいば。もしもの折は必々、さもし
者ものの手にかよらず、潔い御最期ごさいごり。時は違ふと日は同日、最期處さいごころはかはる共、來
世は一ツ蓮葉はすはに、永き契ながちりをめで度たくと」菊このかみそりエ、此剃刀の入いれざまは、何うぞお命助いのちたすけ
たさ、女房にようぼう舅が泣きしみづき、父御ていご様とも争ふ程ほどの大事の命いのち。澤山たくさんそうに死ねと書
た此文このふみに、めでたくとは何なにじやの。男共をとこどもにいひ付叩つたき出してくれふか。イヤくそ
れ程夫ほどの名が立、直ちに逢あふて云いふて退のけう」と、爐路ろじの戸開ひらき立たち出いれば、吾わがナフ與州よしぐ
様さまか懐なつかしや」と、繩なり寄よる手てをしつかと取り、菊おと音とに聞きいた吾妻ごさい殿のか。今の文ふみも見みまし
た。わしや與次兵衛よじべゑ殿の女房にようぼうきくといふ者。遙々はるかの處ところ能よふ御座ござつたの。定さだて主ぬしに逢あ
たかろの。知らしやる通とほりの難義なんぎで、アレあの座敷ざしきに押籠おしこめられては御座ござれ共、おれが逢あせ
ぬ、ア、此菊このきくが逢あせぬ。吾妻ごさい殿のには遠とほふに逢あふて禮れいいふ筈はず。此方こなたゆへに大事かひふの家業かぎふも
余所よそに成なり、内うちは野のとなれ山やまとなれ、夜よを日ひに次ついででの里通さとがよひ。親御おやごの不機嫌おきげん世上じやうの悪口わるくち、
此度このたびの難義なんぎそれ見みたか と彌いよく人のあざけり。我われとても女をんなの身み、腹はらがたいて有物あるものか。夫をんな
の恥辱ちじよく、さがない女房にようぼうといはれまいとたしなんで居ゐれば、お菊おきくは奇特きせきな愔氣りんぎせぬ、賢女けんぢよ
賢女けんぢよと、賢女けんぢよごかしの拜まがみ倒たふしに逢あふて、吾妻ごさい殿のに嘘讀まづひよまれ居ゐるはいの。此方こなたを女郎ぢやうらか

される

いさ傾城—いさ
は罵る詞

勤め計云々—勤
の身なれども馴
染重なるにつけ
愛を増す
女子の馴む風俗
—與次は女の好
く容貌

と思へば鬼か天魔か。此剃刀で人の男に死ねとは。死んでよくば此方一人死んだが能い。大事の男の膚は荒され、心の底は見探され、世間に悪ふ謠はせ、生る死ぬるの難義も誰ゆへじや。傾城殿と女ゆへ。いき傾城の恥知らず」と、積る恨の高聲に、與次兵衛も障子そつと明、彼方も此方も道理詰め、道理の無い是我計、二人の心思ひ遣り、顔は焼火の冷汗に、消へも失せたま計なり。吾いか程お恨みお吐りも、お前に逢ふて此吾妻が申上ふ詞はない。引手数多の身の上さへ、恪氣始は女の常。お心堅ひ町育ち、誠なき傾城めが、だましての賺しての、憎やくはお道理ながら、與次兵衛様に逢ましたは、女房にならふ共、手かけ妾にならふ共、申交した事もなく、勤め計も名染だけ、夜を日にますおいとしさ。女子の馴む風俗、よい殿御持しやんした奥様、お世話はお前お一人。此度の騒動も人違ひを頼もしづくで、お身の難義もわしから起る。相手もやがて死にそなけな。悲しいは我身一つ、知らせて覺悟もさせましたく、廓を忍んで此有様、見付らるればみせしめに逢も合點、相手が死んだら自害させまし、私もお供と剃刀も用意しました。お主の名も流さず、私も情の御恩に命捨る心ざし、お前の御縁は妨げぬ。たつたま一度お顔見せて下さんせ。其目を直に塞ぎます。ナフお慈悲ぞやいと、懐中の剃刀咽

中の餌食を云々
—鼠を與次に聲
へ早く逃亡して
命を助かれと謂
する也

伯父鼠—治部を
さす

に押當て、娑婆の名残と涙さへ、思切たる哀さに、お菊は漸胸開け、袖引とめて、「是吾妻殿、義理にも命捨ふとは僞りにはならぬ事、心底がいとしい、主も定めし逢たからふ。沙汰なしに密と逢せましょ」吾「ア、有難い。了箇深いお菊様。大事の殿御を澤山に抱て寐ました。堪へてや」菊「ハテ取かへされはせまいし、それだけ此方の仕合せ」と、心解けたる爐路の中、「お菊く」と呼ぶ聲は舅の淨閑、鼠取の升落し手に持て、「嫁は何處に」と立出る。菊「アレ爰へ親仁様、折が悪い先少時」と、吾妻を堀の小蔭に隠し、「まだお寐も遊ばさず、夜更て何で御座ります」狸「イヤ別の用はない。是見やお菊、若い奴等が仕懸て置いた升落し、はつたりと響いたゆへ、明て見たれば鼠は逃て往んだと見えて、升の内には何にもない。是でつくづく世の中の悟り開いた。中の餌食を頼みにして油断すれば、落しに罹つてつる殺さるよ。思ひ切て餌を捨、逃て退けば、其鼠が命を助かる計か、親鼠、舅鼠、女房鼠も有であらふ。此一家一門の鼠共が悦び、別して老鼠の親鼠が心の安まりは、いか計嬉しからうぞ。若若鼠の分別なしが逃した跡で、親鼠が又落しに罹らふか、とよしない意地を立おらふが、いかなく親鼠は老功で、落にかよる事じやない。定て伯父鼠も有ふ。其巢へ屈んで、爰らさへ影を見せねば、鼠落しも音なしに成て

白鼠一福の神の
意に用ふ(柳亭
記)

どうがな一どう
したりよから
う
人の父としては
一此句大學にあ
り

濟む。此度の升降しに能ふ懲て、夜る毎に柵走り柵走り、盃嚙つたり、親の小判咬へて
偷んだり、暴れ廻る事ふつく止め、後には白鼠の富貴と榮るを、親鼠が見る嬉しさ何
う有ふ。こわけ鼠の狼狽鼠、此合點が往かぬか、とおりや此比夜が寝られぬ」と、涙
に聲をふくませば、菊「如何にもく、お慈悲な鼠算用。成程私が逆しませう」狸「ヲ、満
足く。ざつと胸が開いた。此比心に此事ばかり、持佛へ參つても佛の顔も見えなん
だ。嬉しや今宵から、心靜に看經せう」と、念佛力の後姿、見るに心ぞ遺瀨なき。
與次兵衛走出、聲を知べのかたじけ涙。おきくは舅の足跡を手に戴いて、「吾妻様與次兵
衛様、今のお慈悲を聞しやつたか。早ふ爰を退く程がお心安め孝行。淨閑様の起臥は、
此菊が居るからは、今迄より猶氣をつける。跡に氣遣ひ遊ばすな。お前に誰ぞ付たいが、
アフどうがな」と案ずれば、吾「是お菊様、それには此吾妻が居る。命を捨て出た廓、二度
歸る心はなし。お前さへ御了簡、お供せよと有なれば、わしや忝ない。廓へは歸らぬ」と、
思ひ詰たる詞の末、菊「ヲ、そんなりや前後首尾が能い。サア更ぬ先に」と引立れば、
與次兵衛袖を打拂ひ、「そうでないく。人の父としては慈にとどまり、人の子として孝
にとどまるといふ。預り者が欠落し、先の相手が死ぬれば、忽親は下主人にとられ首

下主人―下主人

もがられた―た
ばかられた人の生身―生身
は死に身てどう
なるかわからぬ

勿らる。假へ先が無事でも、取逃したる咎めにて、それ程の罪は親仁様の身にかゝる。其難を厭はぬ慈悲心、親仁は親の道が立。與次兵衛は今日迄始終親の氣に違ひ、剩親を身代りに、逃て命助かり、百年千年生る逃、人交りもならねば天地の内には住れぬ。お心をもどくでなく、歎をかくるが面白ふは無けれ共、やつぱり此儘死なせてくれ命を捨て一生の孝行がして死たい」と、聲を上て泣ければ、「これも又お道理」と、二人も心破りかね、泣より外の事ぞなき。淨閑内より聲を上、「お菊く、不孝者めが落まいといふそうな。エ、く、情ない哀知らず。七十に成淨閑が、もがられたといふ外聞悪さ。人にこそ知らせね、内證手を入、二百兩迄扱ふても、足元見て、千兩でも聞ぬといふ。淺疵とは聞たれ共、人の生身何う有ふかと、親の案じは如何思ふ。將棊で心を紛らせば、結句傍から氣を付て、思ひ出す程胸苦しい。宵から心粉にはたいした升落し、量ても量られぬ親の歎を思ひやれ。一生子でも居るまい。一度は親にも成おらふ。胸の中が知らせたい。落るか落ちぬか、はや吐せ」と、聲荒けても泣顔は、壁より外に漏にけり。與次兵衛涙に平臥て「有難いお詞程、如何も此與次兵衛、爰が立て落られぬ。眞平御免」と伏沈む。舞ム、よいく、年寄た親を持者は、一日も親を先だて其身息才で、年

ものは親に
状は先死に死んで
親に申はるゝか
と也

馬では人が云々
馬に乗れば好
都合なれど人に
顔を見らる患れ
あり

忌迫善甲ひたいと願ふぞや。おのれは親に申はれ、歎か懸て見たいか。サア此相口皴腹へ突込で、望の通にしてやるぞ。南無阿彌陀佛」といふ聲に、與申々落ませう待て下され親仁様」と、どうと臥てぞ泣居たる。選ム、しかと落るか「與何の偽申そうぞ一侍ヤレ嬉しや落付た。今迄の不孝皆許し、三十年の孝行をたつた一度に受取た。死んだ祖母も嬉しからふ。お菊には親が有、淨閑にはお菊が有、跡には少も氣遣ひすな。連の女中が有そうな。嫌がる共灸すゑさせ、酒吞せて下さるな。馬では人が頬を見る、高く共駕籠に乗れ。頼みまする」とそこくに、心は千筋百筋の、島の財布を投出し、「さらば」と計云さして、跡は涙に咽びけり。與次兵衛猶も有難き、親の恩と妻の思ひ、別れの辛さに恍然と、きぬけの如くよろくと、前後も分ず見へければ、吾「是吾妻じや合點か。あれは奥様お菊様、さらばとせめて云はんせ。エ、氣の弱いお人や」と、力をつくる我が身も、人目も深く忍ぶ夜の、「いざ合駕籠」と叫て、袖打拂ふ春の霜「駕籠の衆おじや」と招けり。お菊の聲もうらがれて、「なふ何方に落付ても、其儘御無事の便を待。泊々の朝晩に、冷ぬ様に頼むぞや。何やら云たい事共が、胸にはあれど口へ出ぬ。只御無事で息才で」と、いふより外は泣計。菊「誠をいほど我こそは、夫を連れて退が道。何じや妬憎ん

かたし一足も止めぬ
重荷に小付一負担を重からしむる詠

蝶は菜種云々一花の時に出了蝶は種の時には死んでゐる故によ

かたくま一小兒が大人の肩に乗せらるること

だ人、合駕籠で遣る妬ましき浦山しさと悲しさと、涙の筋は多けれど、いとしひ計一道に、見送る駕籠も遙々と、「さらばく」「のふさらば」の、聲を紛らす後夜の鐘、跡へ戻るは雲の足、先へ急ぐは駕籠の足、せめてかたして留もせず、戀の重荷に小付して、親子の哀打乗て、別れて行衛や 三重

與次兵衛吾妻道行 下卷

歌春に育つも花誘ふ 蝶は菜種の味知らず、菜種の蝶は花知らず。知られず知らぬ中ならば、浮れ初めまひ、狂ふまひ物味氣なや。吾妻立寄り、「チ、嬉しやお心も沈つたか。アレ御覽せよ。虫でさへ番ひ離れぬ揚羽の蝶、我々も二人連れ、粹な同士の中々に、お心弱や」と諫むれば、與、歌「吾妻請出せ山崎與次兵衛。請出せく山崎與次兵衛。何時か思ひのナ下紐解て、昔思へば憂や辛や、憂や辛や。忍ぶ昔も憂や辛や」吾情なや誰有ふ、山崎與次兵衛様とて人々に、後れぬ髪に亂れ心、吾妻が顔も見忘れて、現なや」と制すれば、與、歌「和女は藤屋の吾妻かの。與次兵衛に揉れて、色の悪さよいとしさよ。近い内には必と、請て樂さしよ世帯して、子共設けて二人が連て、お乳がかたくまおてよが日傘、肩で風

三重の帯―辛苦に身の細るをい
預る半分の云々
―諺にて與次を預れば半分は預る人の勝手にする
外八文字―女が外輪に八文字に歩く
たらいの底抜け
千代能が歌に「とにかくに巧みし桶の底抜けて水たまらねば月も宿らす」老の戀
しやが父―しやは己にて與次は

切る山崎に、親の御恩を振捨て、和女の世話になりふりも、昔には似ぬ男山、今では人も秋篠や、外山の松よ事問はん。待が辛いかわれが憂か。待も別れもせぬ様に、親の許した女房は、義理と情の二面、かけて思へど甲斐もなく、半太夫今は野末の放れ駒、昨日はあづまに戀を乗せ、今日は古郷の焦れ泣、我から狂ふ秋の葉の、亂れて袖に置もせず、寐もせで露のたまくも、待たるよ共待身に成な親と子の、便りを凌ぐ山崎の、妻も左こそは亂れ髪、いふた詞が力ぞや」吾わしが名染は三重の帯、長ひ夜すがら引しめて、妬み悋氣の心なく、預る物は半分の、主は忘れて居さんすか。過し月見は井筒屋で、底意隈なき夜と共に、踊明した面白さ、わしや百迄も忘りやせぬ」頭歌「忘れぬ物よ見厭ぬ君が、外八文字の道中姿、目付で殺す所躰に泥む。傾城こまめにたらいが女房、請出したらいの底脱て、影も宿らぬきぬぐの、親を悲しみ妻を戀ひ、心一つを二しなに、名乗て過る杜鵑、しやが父に似て父に似ず、子は色里に初音ふる。タ、冠は被ねど大臣と、花車が轟く口舌の門、遣手が叩く禿が睡り、皆夢の間の境界と、破ればぐはちも無りけり。かくは知れ共柳の糸の、蓬を亂す山嵐、劇しき親の諫めの詞、妻が別れの一言葉、身に染々と戀しや」と、互に手に手を取交し、聲も惜まず泣居たる。夕陽岫に程もなく、

父に似ぬに譬ふ
萬葉集の己か父
に似ては泣かす
云々の歌をとる
破ればぢわち
曉れは粹も無粹
もない(解遊笑
望)の足一雲の足
か
當つて碎くる
末の見込は判ら
ぬが進んで行く
との話
願一來るにかく

難與平一なるに
かく
内大臣一ないに
かく
輕薄に一も愛想
に
油載せたる云々
油血載せたる
燈臺は座敷に出
されぬ故燭臺に

西北に風起り、東南に向ふ空の足、梢木の間もはらくく、小川の水音さらくく、
雲の羽袖もひらくくと、彼方へ靡き此方へ靡き、くるりくくると廻りめ
ぐるや、月は行け共果しなき、思ひは目前親の罰、當つて碎くる男の姿、走れば走り留
れば留り、狂はぬ袖も亂れ心、命つれなき流れの身、流れ渡りの世の中に、しばし留ま
る賤が家の、軒を尋ねて三重惱みけり。

難波瀾、梅に名を取り松繁り、紅葉の錦畫さへや、夜見世を新にお許しと、疾しや遅しと
見に靡、四筋の町の軒深く、燈火星の如くにて、三五以上の月の顔、さす潮影のわけも

よき、局々の手拭は、濡ぬ隙こそなかりけり。太鼓は打たで大門に、轟く馬の高嘶き、井
筒が許へ乗懸の、客は八幡の難與平、威勢美々しく飛下るれば、亭主迎ひの槌で庭、難は
くまい九郎左、見忘れか。當正月には造作の上、貴殿が世話に難與平、以前は金銀内大
臣、今日参るは内證に、様子も金も有大臣。罷通る」とつと入、九誠にそうよお珍らし。

先お茶烟草」と輕薄に、油載せたる燈臺も、はや立替る蠟燭の、流れの里ぞ氣散じ成。
難九郎左近ふ」と招き寄せ、「知らるよ如く此正月、藤屋の太夫に囉ふた金、直に東に芽
を出して、人いためずのどか儲け。馬の背骨も折甲斐有ッて、此度罷歸る處、太夫吾妻

替ふ、蠟は流るる物故流れの里と續けたり

露一祝儀

とれたか一儲かつたか
ちよつつられ
一かすられた

不便さに一原本不便さき
酒戻し一目出度
い酒の禮は返さ

は廓を逃出、關を破りし科人と、行ゑをもとめ探さる由、道中すがら承る。恩を受詞を番ひし此與平、捨置ては男立ず。彼を受出し世を廣ふしてやらん。吾妻が年季の證文あらん、此方へもらひたし。金に換て今宵の中に首尾する様、九郎左御差配く」と、ちよつとの露もしつほりと、家内潤ふ計なり。九「おめでたいく。お聞と有からは申に及ばず。去ながら、不思議な事が御座ります。今日暮方に、田舎めいたる浪人衆、吾妻は爰に居られず共、手形成共身請がしたい。金はなければど一腰の宇多の國行、二尺計の大刀物、折紙共に引換へと、奥の座敷に居られます。親方へはまだ知らさず、お前と一所に親方へいふて見ましょ」と立出る。表の騒ぎは葉屋の彦介、どかくと入來たる。九「コリヤ珍らしい旦那」彦「とれたかく、果報な九郎左、金儲けうなら我等に廻れ」九「軽いお出が身請の談合」彦「強いかく、知た通此春早々、山崎の與次兵衛めに小鬢先をちよつつられた。弓矢八幡堪忍せぬ氣、代官所へも訴へ、親淨閑に御預け、内證から手を入て段々と佗言する。金銀で扱へば百萬兩でも聞ぬ男。コレ見よ疵も平愈した。與次兵衛めは憎けれ共、親めが心の不便さに許して遣た。其禮とて目くさり金、樽代としてよこした。酒戻しはせぬ物ゆへ、先あ受取て置たじや。吾妻めが關破りも與次兵衛が咬し、お預の内を連て逃た。

ぬもの

淨閑は其崇りに、吾妻與次兵衛尋出す迄、道具諸色に封印付、厳しい閉門。聞けば與次兵衛めは野倒死したけな。出れば其儘切らるゝ首、仕合者じや有まいか。扱談合は吾妻が事。關破りの科人、此奴が命も助からぬ。佛性に生付たが彦介が病じやは。是も助けて取らせない。先吾妻めが手形を請出し、跡では緩々行衛を尋、食でも焚せ、すよぎ洗濯、手足擦らせ、一生は養ひ殺しにする覺悟。彦介なりやこそこうもいへ。相談して埒明い。コリヤ現銀じや」と五十兩、亭主が前へ投出す。與平は始終を聞濟し、「御免」と襖押開き。難亭主々々、吾妻が身請は身が先じや。金子は是ぞ」と持せたる、千兩包の本地の臺、前へすつしり筋らせたり。翌前後の争ひなされるれば、此浪人者は一番」と、呼はつて座敷に出、「身請の代金此一腰、三千貫の折紙」と、共に投出す態恰好。中子は

福德の三方一福
徳の三年目の縁
にかけたり
服部一煙草の産
地にて攝州豐后
郡にあり

見ねど與次兵衛が物語の治部右衛門、紛ひなしと難與平、口を閉て窺ひ居る。亭主九郎左は、福德の三方論義に行當り、九兎角は親方了簡次第、呼にやらふか身が參らふ。それは御九郎左くと、獨語して断出す。跡は互の睨み合。彦介は手懲した、與平が顔の氣味悪く、心も心ならね共、見付は厳しい服部育ち、煙草盆引寄せて煙吹出す佛頂煩、烟管ぞ迷惑灰吹を、敲いて返事を待居たる。吾妻が親方勘右衛門、亭主に連て座敷に出

「様子は九郎左物語、吾妻が手形を身請とは、終に廓に無い格にて、兎角ふのお返事申難し。何れへ手形上ましても、此事世間に流布有て、欠落させた跡にても、金さへ遣は濟事と、悪い性根を吹込れ、其處にも欠落、爰にも辻た、又しては關破りと、廓の騒動、親方中間の難義なり。此相談は成ますまい。一旦吾妻が顔を見て、其跡で能様に」と、聞も敢ず彦「聞えたく。余人は知らず此彦介、早速吾妻を尋出し、身受はおれじや詞を番ふた。罷歸る」とずんど立。「そうはさせぬ」と難與平、小腕取引擔きてどうと投、脊骨にしつかと打跨り、「辻足も往に足も達者に生れ付た男、動かば頭撲碎く、合點か。藤屋の勘右尤千萬。今の詞は聞處、吾妻が顔を一目見たらば、其座で見受は違ないか」勳「何んの虚言申ませう。末に年季の少い吾妻、今迄金は儲けてくれる。偽は申ませぬ」難「ム、おもしろい。代官所の首尾も別條ないか」勳「其段も此方より申下せば相濟ます」難「珍重珍重。下々共其革葛を持って来い。亭主二つを開かれよ」勳「應」と葛籠の紐とくく、中より吾妻與次兵衛、正氣に成て立出る。彦介は喫驚りし、親方亭主も興覺め顔。治部右衛門は包かね、「ヤレ與次兵衛か、治部じやく。無事な顔見て嬉しや」と、跡は云はずの悦び涙。與次兵衛も頭を下け、「何事も御免有。親淨閑へお佗言」治「頼むに及ばぬ淨閑の心入も聞

三度敷一二度あれば三度あるといふ語をとりて幸福なる事三度あつたと也

て居る。吾妻もいかい苦勞めさつた。ナフ親方殿、此一腰に引換て、吾妻を身共に下され」と、手をつけば、吾妻も、「久しい九郎左様、旦那様へお佗言、頼まする」と泣居たる。與平は勇んで彦介を取て引立、「おのれ能ふ聞。此與平が江戸へ稼ぎの根本は、吾妻を受出して廓の苦患を助けんと、思込だる一商ひ。五百貫目に間の無い金、手間隙入ず儲け溜め、立歸る途次、與次兵衛殿にもお目にかより、様子は段々聞届た。おのれを切たは此與平。與次兵衛殿に難義を見せ、金銀大分取たな。打のめしても腹愈ねど、めで度時節じや。とつとと歸れ」と突放せば、吾ア、有難や。正月も此座敷で取て投げられ、跡は切れて今日は又、殺さるよかと思ふたが、お助けはかたじけない。三度の敷が合ました」と、逃出るを治部右衛門、腕挫ぎに取て投、「おのれは何うも往なされぬ。淨閑が云譯させ、閉門御免請ねばならぬ」と、手ばしかく縛り上、身受は濟だか與平殿、「いやまだ濟ぬ。金子は千兩、一枚の手形に換て」と難與平、親方が前に置。勘右衛門頭掉り、「來二月には年も明、身任せに成吾妻、千兩といふ金取ては、人の思はく男が立たぬ。金取らず共と申たけれど、よもやそふはなされまい。跡六月をば三百兩、残りはいらぬ」と突戻す、與平素より氣散じ者「出來たく、手形は取た金取た。吾妻が身受濟ました。其

打ておけ—談判
 決定のしるしに
 手を打つ也
 ナつとせ—
 もつと拍手せよ
 と也
 座敷に色替—座
 敷をして金の色
 にかはらしめた
 り

處こで請出うけだす三百兩、打うておけ—しやんく。「ま一つせい」しやんく。「すつとせい」
 「コリヤ亭主ていしゆ、此千兩は始はじめより身受みうけに當あてた。一錢せんでも残のこしては本意ほんいならず。三百兩は亭主
 にはづむ」亭てい主しゆ「コリヤ、忝かたじけない」難みたくちあはせ「二口合ふたぐちあはせて六百兩、打うておけ」しやんく。「四百兩残のこつて
 氣きにかよる。寄ようて祝いはへ」とばらくくく、金かねは座敷ざしきに色いろかへたり。揚屋あげやの男女別なんによわかちなく、
 押合おしかひへし合あひ拾ひろひ取り、難みなざりこ皆取みなざりこ込んだかめでたいく。祝いはふて三度さんどしやんく」と、
 手拍子てびやうしに口拍子くちびやうし、仕合拍子しあはせびやうしの三三九度さんさんく、末すえは千秋萬年せんしうまんねんも、變かはらぬ妹脊いもせを重かさねける。

